

風土同

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉第129号 令和8年(2026)10月1日

資料見聞

受法寺の鬼瓦 (高知市・受法寺所蔵)

高知市浦戸の龍頭山受法寺に、鬼瓦が保管されている。『長宗我部地検帳』では、「道場やしき」と記載されており、寺記では一向宗の道場があったようで、文禄年間(1592～1596)に受法寺と称したとある。文禄年間と言えば、長宗我部元親が、大高坂から浦戸に城の拠点を移して、豊臣秀吉からの支援で織豊系城郭を築いている。土佐で初めての天守を構築しており、近世城郭の始まりである。受法寺は、2代目住職が池慶乗で、長宗我部氏の家臣であったとされ、水軍を率いた大將と伝わっており、浦戸城や長宗我部氏と密接な関係が認められる。その受法寺に保管されている鬼瓦は、浦戸城との関係がありそうである。

鬼瓦は2面あり、よく観察すると一つは陽の鬼瓦で額に日輪を入れ、一つは陰の鬼瓦で額に三日月を飾っている。鬼瓦の上部幅35.6cm、高さ55cm、最大幅68.3センチを測り、裏側は平坦で、中央に径16.5cmの円孔の中に柱がある。瓦の形状が風字をとっており、風の災害を除去する意味を持っているとも考えられている。この2面の鬼瓦側面には、銘が刻まれており、陽の右側面、そして陰の左側面に同じように「文禄四年霜月吉日 舟治吾左衛門」と



銘文



鬼瓦〈陽〉



鬼瓦〈陰〉

刻まれ、陽の左側面と陰の右側面には「泉州大鳥郡深井郷嶋村」と刻まれている。この銘文でこの瓦の製作年代や工人名、さらに製作地までわかる。製作年代は、文禄4年(1595)で元親が浦戸城への移城を始めてから4年

後である。製作地は「泉州大鳥郡深井郷」とあるので現在の堺市深井で、工人は舟治吾左衛門である。この瓦が何故製作され、この受法寺に保管されているのか興味をそえられる。

これまでの研究では、受法寺は永正年間(1504～1521)に真宗道場が開かれ、文禄年間に受法寺と改修されたことで、道場から受法寺へと建てなおされた段階で、この鬼瓦が製作され、葺かれたものと考えられてきた。鬼瓦は魔除けの役割があるとされるが、浄土真宗では阿弥陀如来によって救われていることから、鬼の意匠は用いず、本堂には鬼瓦は葺かれていなかったとする言い伝えもあるので、浦戸城に使用されていた可能性も考えられる。

元親は浦戸に移城してから、秀吉の朝鮮出兵にかりだされ、帰国するのが文禄2年(1593)である。それまで浦戸城の改修は大きく進んでおらず、帰国してから本格的な着手を始めたと考えられる。さらに、文禄4年には浦戸城下への移住命令などの文書なども確認されており、本格的な浦戸城の整備は文禄4年頃ではないかと推察できる。発掘調査で鯰瓦片も出土しており、鬼瓦も鯰瓦と一緒に天守に葺かれたとすると、構築された時期が鬼瓦の銘から分かる重要な資料となる。(松田)

企画展 長宗我部元親の城づくり ― 四国制覇に向けて ―

会期…令和8年10月23日(金)～令和9年1月11日(月・祝)

松田直則
曾我満子

今年度、高知県で開かれる「よさこい高知文化祭2026」にあわせて、本展を開催します。当館は、四国を代表する戦国武将・長宗我部元親(1539～1599)が居城とした岡豊城跡に立地しており、常設の「長宗我部展示室」では、ゆかりの資料を展示しています。また、これまでに長宗我部氏に関する企画展も度々開催してきました。全国から本県を訪れる方々にも高知らしく、しかも興味をもっていたけるテーマは何か、ということ、長宗我部元親の城づくりに焦点を当てることとしました。

当館では、長宗我部元親について「四国を代表する」というフレーズで紹介をしています。一般的には「四国を統一した」「四国の覇者」などという表現が使われますが、近年の文献史料の研究によれば、四国全土を統一はしていない、というのが定説となっています。また、城郭研究によれば、「長宗我部流」ともいえる特徴をもった城づくりが四国の各地にみられることが明らかにになってきています。「長宗我部流」の特徴を備えた城を追うことにより、元親の四国制覇の様子が解明できるのではないかと考えられています。

本展では、主に城郭研究の成果に拠り、元親の四国制覇の実態はどのようなであったのか、また天正3年(1575)に土佐を統一した後、どのようなルートで四国各地に勢力を拡大したのかについて迫りたいと考えています。

城の姿を知るために、城郭研究においては、縄張図^{なわばりず}がよく用いられます。縄張とは、曲輪^{まがわ}や堀^{ほり}・土塁^{どるい}などの配置を設計することを指し、その図面は縄張図と呼ばれます。しかし、一般の方々が平面の縄張図のみで城の姿をイメージするのは、少しハードルが高いと思われるので、本展では、故香川



岡豊城跡出土天正三年銘瓦(高知県立埋蔵文化財センター蔵)

元太郎氏の城郭想像図を使用させていただきます。さらに、初の試みとして、生成AI^{ジェネラティブAI}を利用し、立体的、かつビジュアル性に富んだ城郭想像復元イラストを作成し、ご披露します。

また、元親の城づくりにおいては、織田信長や豊臣秀吉といった中央政権が手がけた城づくりと類似する点も指摘されています。そこから何が見えてくるのかについても、取り上げます。

それでは、以下、章別に展示内容の一端をご紹介します。

I章 土造りの城

長宗我部元親が活躍したのは16世紀の後半です。それより前の中世の城の姿はどのようなものであったのか、芳原城^{はら}を例にご紹介します。

芳原城跡は、高知市春野町芳原の吾南平野^なの独立丘陵に所在しています。多量の木製品をはじめ、赤絵碗^{せいか}ほか白磁・青磁^{せいか}・青花^{せいか}の貿易陶磁、備前・瀬戸美濃^{とみなめ}・常滑^{とこなめ}ほかの国産陶器等々が出土しています。中でも、出土した木製札^{はし}(護符)には明応2年(1493)の年号が記され、城の機能した実年代を知ることができます。

城は土塁^{ほりきり}、堀切^{ほりきり}や堅堀^{たてほり}を備えておらず、切岸^{きりぎし}によってつくりだした平坦面を曲輪^{まがわ}としています。建物は地面に穴を掘って柱を直に立てるタイプの掘立^{ほったて}柱建物^{はしら}で、近世城郭のような礎石^{そせき}の上に柱を据え、屋根は瓦葺き^{かわらぶき}という建物ではありません。また、

石垣はなく、後の時代に築かれた「石の城」に対して「土の城」と呼ばれる典型的な城です。



芳原城跡出土赤絵碗(高知市蔵)



絹本着色長宗我部元親像(部分・重要文化財)
(高知市秦神社蔵)

Ⅱ章 長宗我部の城

長宗我部元親は岡豊城を拠点としていました。岡豊城の築城年代の詳細は不明ですが、元親の祖父（元秀）の頃の永正5～6年（1508～1509）には落城したといわれていますので、それ以前から長宗我部氏は岡豊城を拠点としていたようです。

岡豊城跡は当館の建設に先立ち、昭和60年（1985）から平成2年（1990）にかけて発掘調査され、多くの遺構や遺物が検出されました。城跡の遺構は一部復元し、ご覧いただくことができます。

城を特徴づける防御施設としては、曲輪の周囲に土塁を巡らせる、その土塁の下部に石積み（いしづみ）がみられる、連続し



芳原城想像復元イラスト

（縄張図を参考にAIで生成し、当館が改変して作成）

た堀切や堅堀がある、虎口を備えている、などがあります。

中でも、連続した堀切や堅堀は、土佐一条氏に関連した城跡から相次いで確認されており、元親が城の守りを強固にするため、自らの城づくりに取り入れたと考えられます。石積みについては、石垣への志向とも考えられますが、まだ土留め（どどめ）としての機能の域を出ていません。



岡豊城想像復元イラスト

（縄張図を参考にAIで生成し、当館が改変して作成）

虎口（こぐち）は、城の出入口を狭めることにより、守り易く・攻めづらい構造とするものです。加えて折れも作り出しています。さらに、虎口の直前には門があったと考えられ、一直線に見通せない構造としています。



岡豊城跡四ノ段虎口



岡豊城跡虎口前の巨石

この虎口前には、巨石が並んでいます。巨石は、近年、織田信長の岐阜城跡やその前の斎藤氏時代の稲葉山城跡の一ノ門にみられる巨石との類似性が指摘され、城づくりにおいて、信長や美濃（みの）地域の影響、あるいは技術支援があったのではないかと考えられています。

岡豊城跡の北麓に位置する長宗我部氏の寺跡（瑞応寺跡（ずいおうじ））においても、巨石が用いられていたことが明らかとなりました。その寺跡は池を備えており、岡豊城の迎賓館（げいひんかん）として機能したのではないかと考えられています。岐阜城の麓に広がる千畳敷（せんじやうじき）遺跡も、迎賓的空間と考えられ、元親は城づくりにおいても信長の影響を受けたと考えることができそうです。



岐阜城（稲葉山城）跡一ノ門前の巨石 2025年撮影



岐阜城千畳敷遺跡出土金箔棟板飾り瓦
〈牡丹文・復元〉

（原資料は岐阜市重要文化財・岐阜市蔵）

さて、元親が居住したのは、どの曲輪だったのか、ということがよく話題に上ります。一番高い詰からは礎石建物跡が確認されていますが、城主の生活空間としては、少し狭過ぎます。城主の住まいは山城の麓に築かれるともいわれますが、同時代のほかの城ではどうだったのでしょうか。

ルイスフロイスの記述によれば、岐阜城の山上部には、もてなしの空間（御殿）が存在していたようです。また、浅井長政の城で知られる小谷城（滋賀県長浜市）では、山麓の谷部に「御屋敷」という区画があったようですが、山上にも「大広間」という曲輪があったことが分かっており、御殿にふさわしい広大な空間が広がっていました。

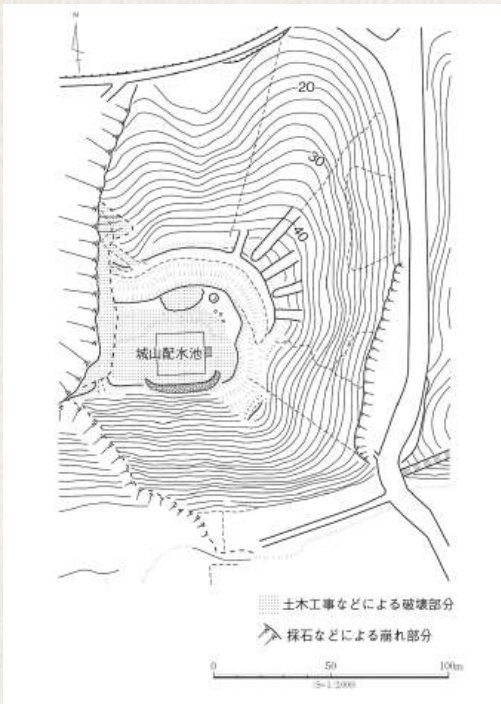


小谷城跡の「大広間」 2025年撮影

話は岡豊城に戻ります。当館の建物がある場所は、発掘調査されていますが、平坦面としては城内で一番広い空間です。当館が建つ前は、昭和時代に「岡豊山ハイランド」というレジャー施設があった場所で、その時の開発により、遺構を明らかにすることができません。しかし、当館の立つこの場所に、元親の御殿があったと考えてもよさそうです。

Ⅲ章 四国制覇を目指して

元親は、天正3年（1575）に土佐を統一しました。その後は、阿波、讃岐、伊予へ勢力を拡大すべく、動き出しました。それは軍事力に加え、侵攻する地域に協力者をつくるなどの外交戦も織り交ぜながら進められました。

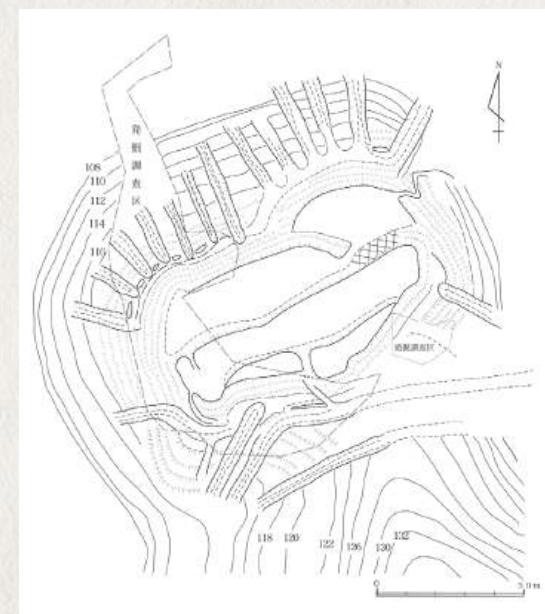


木津城跡縄張図〈本田昇氏作図〉

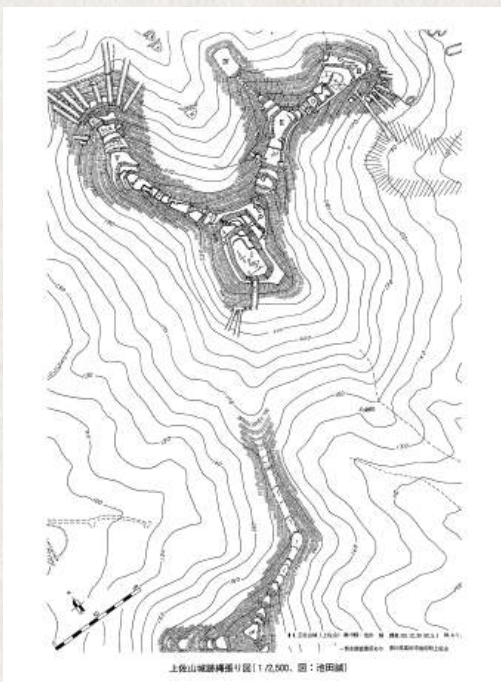
阿波の木津城跡（鳴門市）では、徳島ではみられない遺構が確認されています。それは、横堀・土塁・5条連続する堅堀がセットになった畝状堅堀群です。岡豊城跡の四ノ段北西部にも同様の遺構がみられます。木津城は天正11年（1583）4月21日

に築かれています。これらの遺構は香川県内の城ではみられない特異なものです。天正13年（1585）6月、羽柴軍が屋島へ上陸しましたが、その進軍ルートを阻むため、長宗我部勢が守

以前に長宗我部勢により攻略されており、その後東條関之兵衛を入城させ、城の改修時にこの防御施設を構築させたと考えられます。



元城跡縄張図（公財）愛媛県埋蔵文化財センター提供）



上佐山城跡縄張図〈池田誠氏作図〉

りを固めるために築いた「長宗我部流」の防御遺構と考えられます。

伊予の元城跡は大洲市新谷山口に位置し、残存していた部分が発掘調査されました。主郭と考えられる北面の切岸下には横堀と連続縦堀がセットとなつた畝状縦堀群が検出されています。また、南側は鞍部が2重から3重の堀切で遮断されていて、いずれも「長宗我部流」の防御施設です。本城は長宗我部氏に協力した、この付近の土豪である平氏の勢力圏に築かれた城です。長宗我部元親から平氏への書状が残されており、その中には元親重臣の久武親直の名がみえ、城の再構築には親直が関与したと考えられます。城郭と文書の両面からアプローチが可能な貴重な城です。

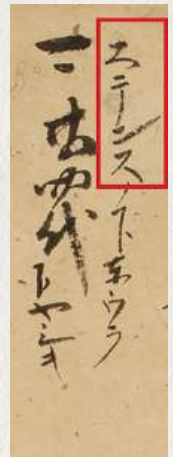
IV章 石造りの城 ―豊臣の臣下として―

天正13年(1585)、羽柴(豊臣)秀吉の四国攻めを受けて、元親はその軍門に下ることとなりました。その時の居城は岡豊城でしたが、天正16年(1588)頃までには大高坂城(現高知城)へ移ったと考えられます。大高坂城跡では、現高知城の三ノ丸から2.7mの高さの元親時代の石垣が確認されています。また、秀吉から使用を

許された桐紋の瓦も2点出土しており、豊臣の影響下で城づくりが進められたことを示しています。『長宗我部地檢帳』の「大高坂之郷地檢帳」にはこの城の箇所「大テンス」の記述があり、天主をもつ城であつた可能性があります。



大高坂城跡の石垣 (高知県立埋蔵文化財センター提供)



『長宗我部地檢帳』のうち
「大高坂之郷地檢帳」(重要文化財の大テンスの記述
部分) (高知県立高知城歴史博物館蔵)

天正19年(1591)、元親は再度居城を浦戸(高知市)へ移します。浦戸は海に面しており、海上交通の要ともいえる場所です。城を移した直後は、秀吉による朝鮮出兵(文禄・慶長の役)が行われた時期で、長宗我部氏の海軍力が秀吉に期待されての城移しと考えられます。発掘調査の結果、石垣が見つかり、雁木(石段)の構造をもつものも含まれていました。

浦戸城跡の近くに受法寺というお寺があります。その寺には大型の鬼瓦が一对残されています。(巻頭頁)瓦の側面には「文禄四年霜月吉日舟治吾左衛門」「泉州大鳥郡深井郷嶋村」の銘が刻されており、瓦の製作年と産地が泉州(現大阪府南部)であることが明確で、浦戸城の建物に使用されていた瓦ではないかと考えられています。

浦戸城跡では、石垣上に築かれた天守台が確認されており、土佐では初出現の天守台です。

本格的な高い石垣は、岡豊城では築かれることはなかったのですが、大高坂城や浦戸城で突如として出現します。岡豊城では土留めとしての機能をもつた石積みで、わずかな期間で石垣へと大きな飛躍を遂げたこととなります。それは元親単独の力で成し得たというより、豊臣政権の城づくりのノウハウが導入された結果と考えられます。岡豊城跡では織豊系城郭の石造りの城の要素である石垣・瓦・礎石建物のうち、瓦と礎石建物跡が確認されていますが、大高坂城と浦戸城では、石垣も含めて全ての要素が揃います。土佐における最新の「石造りの城」は豊臣政権の影響下において、完成をみることとなりました。

元親が城を造った時期は、群雄割拠から中央集権的な政治体制へという激動の時代でもありました。城づくりも当時の政治や社会を如実に映したといえるでしょう。



大高坂城跡出土桐紋瓦
(高知県立埋蔵文化財センター蔵)

次回企画展

植物とくらし — 茅葺職人 川上義範さんのわざ —

小林 兆太

調査中

現在、令和9年2月26日から開催予定の企画展「植物とくらし — 茅葺職人 川上義範さんのわざ —」の開催に向けた調査を実施中です。

当館にはかつて東津野村（現・津野町）に建っていた茅葺き屋根の古民家「旧味元家住宅主屋（登録有形文化財）」が移築・保存されています。茅とはスキヤヨシなどの植物のことで、それらを使って葺かれた屋根は定期的なメンテナンスが欠かせません。

まず、屋根材の虫除けや防腐のためには屋内の囲炉裏で火を焚き、屋根を燻す必要があります。囲炉裏を使った日常生活を営んでいる民家であれば自然と屋根が燻されていきますが、当館ではその代わり、毎月の第三日曜日に囲炉裏で火を焚くイベントを実施しています。

それでも屋根材は徐々に劣化していくため、棟（屋根の頂上）はおよそ4年、屋根全体はおよそ20年に1回の頻度で葺き替え（屋根の交換）を行う必要があります。旧味元家でも平成元年の移築後、平成20年に葺き替えを行っています。この葺き替えにあたったのが、数少ない現代の茅葺職人である川

上義範さんです。梶原町在住の川上さんは近隣だけでなく、県内外の数々の茅葺きを手掛けています。

本企画展では川上さんが製作した茅葺き屋根の模型を展示し、高知県における茅葺き民家にまつわる技術や文化を紹介します。



旧味元家住宅主屋

茅葺き民家のくらしの聞き取り

昭和30年代頃までの高知県の山間部では、茅葺き民家が立ち並ぶ集落の風景が各地で見られていました。こうした集落では、先に挙げたような茅葺き

屋根の葺き替えや修理も職人によるものではなく、集落の人々による共同作業で行うものでした。川上さんも元々は生まれ育った梶原町上本村の集落の一員として、茅葺きの作業に参加する中で技術を身に着けました。

当時のくらしを調査し、展示を作っていくため、川上さんと同じく梶原町在住で茅葺き民家での暮らしを経験された中越甫さんにお話を伺っています。中越さんは梶原町の中でも愛媛県境に近い越知面地区の井ノ谷集落で昭和10年（1935）に生まれ、川上さんと同じく、生まれ育った集落で茅葺きの葺き替えに参加していました。

中越さんからは、地域の中で営まれていた茅葺き民家のくらしについての、生き生きとした語りを聞くことができました。集落中の人々が総出で行うことになる屋根の葺き替えは、必要な作業であると同時にイベントでもあったそうです。葺き替えが終わった後には茅の切れ端で作った土俵で相撲を取ったり、疲れを労う宴会が開かれたりといった楽しみがあったといっています。

中越さんの語る井ノ谷集落の話

また、調査の中では茅葺きのことだけでなく、当時の井ノ谷集落とその周辺にまつわる様々なお話を聞くことができました。曰く、隣の集落までの峠道の途中に、大蛇が棲んでいたという伝説が残る池があった。曰く、橋のたもとに「スナマキ」というお化けが出るという噂があった。曰く、家をバラバラに解体しても柱の位置を完璧に記憶し、元通りに建ててみせる名人の大工がいた……。

聞き取りの中で不意に飛び出す話題もまた、調査の面白さのひとつです。今回の企画展ではそうした、かつての高知県の集落の姿もご紹介したいと考えています。



井ノ谷から望む山並み



いろいろの火たき

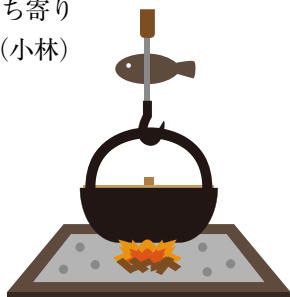
4月から6月にかけて、第三日曜日に当館の屋外展示「旧味元家住宅主屋」にていろいろの火たきを実施しました。

当館のカルチャーサポーターの協力のもと、いろいろの火で焼き芋を焼いたり、お茶を淹れたり、立ち寄られた来館者の方々も一緒に火を囲み、のどかで和気あいあいとしたひとときを過ごしました。

茅葺き民家の維持のために欠かせないこの作業。今年4月より前任から火たき担当を引き継いだ私ですが、いろいろの扱い方を絶賛勉強中です。

7月から8月の真夏の期間は猛暑のため、一旦休止としていましたが、また9月から再開します。当館の各SNSでも予告を発信していますので、ご興味のある方はぜひお立ち寄りください。

(小林)



からくり人形の実演

夏の企画展「からくり人形のヒミツ」の関連企画として、からくり人形師の半屋弘蔵さん（栃木県在住）に、計11回の人形実演をしていただきました。広報では「復元茶運び人形」としていましたが、「復元段返り人形」「復元品玉人形」の実演もしていただいています。

会場では、人形が目の前で動いたり、半屋さんが内部のしくみを説明すると感嘆の声が上がり、また半屋さんのユーモアあふれるトークには、たびたび笑いが起こりました。近寄ってよく見ようとするお客様もあり、動くからくり人形を間近で見られる貴重な機会を提供できました。

(亀尾)



夏休み、学童クラブへ出張しました！

夏休み期間中、学童クラブへ出張授業を行いました。

今年は、8月4日介良潮見台小学校、6日泉野小学校、13日江陽小学校の3回実施しました。

介良潮見台小学校では、企画展「からくり人形のヒミツ」（9月27日まで）に関連して、プラスチック製の復元茶運び人形を持っていき、その仕組みや細川半蔵について紹介しました。そして、子どもたちに実際に人形を動かしてもらった体験を行いました。電気も使わず動き回る人形に、子ども達も「すごい！」「もっとやりたい」「なんで回るが？」など興味津々。初めは日本人形のような顔立ちの茶運び人形を「ちょっと怖い」と言っていた子もいましたが、終わりには頭を撫でながら「かわいい」と言ってくれました。

(那須)



三里中学校職場体験

6月11日、12日の2日間、高知市立三里中学校の3年生1名が職場体験に来館しました。これまでも当館を家族で訪れたことがあり、歴史や博物館の仕事に興味をもってくれたとのことでした。

職場体験では、受付など来館者の方と接する業務はもちろん、展示クイズのキャプション作り、モノ作りイベントで使用する道具類の準備など、普段はなかなか知ることのできない博物館の裏側の仕事を体験してもらいました。

なかでも、民俗資料の整理では、民具の採寸をしたり、スケッチを描いたり、博物館の基礎となる資料台帳の制作を体験しながら、学芸員から「同じように見える民具にも地域や時代によって少しずつ違いがある」ことなどを説明しました。終了後には、「民俗資料に興味をもった」との感想もあり、私たちもうれしく思いました。

(那須・小林)



第17回 長宗我部フェス

10月31日(土)

岡豊山に居城を構えた戦国武将・長宗我部氏を盛り上げるイベントです。迫力の鉄砲隊演武、「傭兵舞台」によるパフォーマンス、中井均先生と当館副館長 松田のトークショーなどのステージイベントやグルメもお楽しみいただけます。



※当日は当館の駐車場は使用できません。
臨時駐車場等からのシャトルバスをご利用ください。

関連企画 要予約 参加費無料

■中井均先生と山城探訪—久礼田城跡をゆく—
開催日時：10月30日(金) 14:00～15:00
集合場所：パシフィックゴルフクラブ駐車場
(南国市才谷778)

■戦勝祈願—岡豊別宮八幡宮をゆく—
開催日時：11月1日(日) 14:00～15:30
集合場所：当館第一カーブ駐車場
(県道入ってすぐ)

※9月15日(火)9時より、ホームページおよび
お電話での予約受付を開始いたします。



れきみんのお正月

1月2日(土)・1月3日(日)



子どもから大人まで楽しめるお正月にちなんだ催しがいっぱい。歴民館で新しい年をスタートしませんか。

無料・高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳
所持者、身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者
保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所
持者とその介護者(1名)
印刷・川北印刷株式会社

※特別展は別に定めます

観覧料
(企画展) 常設展示込み
団体(20名以上) 7000円
団体(20名以上) 5600円

観覧料

(通常展) 大人(18才以上) 5000円
団体(20名以上) 4000円

休館日

年末年始12月27日～1月1日
臨時休館することがあります

開館時間

午前9時～午後5時

〒783-0044

FAX 088(862)2110

編集・発行

高知県立歴史民俗資料館

令和8年(2026)10月1日

南国市岡豊町八幡1099-11

TEL 088(862)2211

岡豊風日(おこうふうじつ) 第129号

令和8年 秋の企画展

長宗我部元親の 城づくり

—四国制覇に向けて—

10月23日(金)

～令和9年1月11日(月・祝)

四国各地の城郭に見られる、長宗我部流の城づくりとは？

城から見えてくる四国制覇の実態は？

また、元親の城・岡豊城と信長の城・岐阜城との共通点にも迫ります。



岐阜城千畳敷遺跡出土
(山麓居館)
金箔棟板飾り瓦
[牡丹文・復元]
(岐阜市蔵)

関連催し

■講演会「長宗我部氏と豊臣氏の築城—岡豊城と浦戸城—」

開催日時：11月1日(日) 10:00～12:00

講師：中井 均氏(滋賀県立大学名誉教授)

■講座1「長宗我部元親の四国制覇と城づくり」

開催日：11月3日(火・祝)

講師：松田 直則(当館副館長)

■講座2「岐阜城と岡豊城」

開催日：11月14日(土)

講師：内堀 信雄氏(岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課特任研究員)

■講座3「長宗我部氏の南予進出」

開催日：11月23日(月・祝)

講師：山内 治朋氏(愛媛県歴史文化博物館学芸主幹)

■講座4「長宗我部元親の外交戦

—原文書にみる阿波・讃岐・伊予の土佐方武将たち—

開催日：12月19日(土)

講師：野本 亮氏(当館資料調査員)

※いずれの講座も14:00～15:30

※講演会・講座は要観覧券・要予約(先着各100名)、
オンライン聴講も可能

予告

次回企画展

「植物とくらし」

—茅葺職人 川上義範さんのわざ—

令和9年2月26日(金)～5月16日(日)



梶原町中ノ川の茶堂

<https://www.kochi-rekimin.jp>

Eメール：rekimin@kochi-bunkazaidan.or.jp